

デ・レーケ と富山

明治26(1893)年9月2日から7日かけ、デ・レーケは8回目となる富山訪問をしている。

同年3月に、常願寺川改修工事はほぼ竣工しており、デ・レーケは2日間をかけた完成した箇所を視察。合口用水の取水口が土砂で埋まり水門の扉と開閉器具が破損したこと、デ・レーケは上流側にもう一本トンネルを開削し、取水口を変更するよう高田に指示している。

さて、デ・レーケといえば、常願寺川を見て、「これは川ではない滝である」と言った、というエピソードが広く知られている。これに

ついて、市川紀一さんや上林好之さんは、富山県の職員が、大災害の復旧は大工事になるので県が施工するには技術者と資金が不足するため、内務省直轄事業としてもらうように「滝のような急流に原因があるのだ」と情緒的に表現したのでは？と推測している。

市川紀一さんが高田家で発見した文書の中には、富山県知事が内務大臣に上申したときのものと思われる文書があり、それには、「七十有余ノ河川皆極メテ暴流ニシテ、山ヲ出テ海ニ入ル間、長キハ六七里、短キハ二三里ニスキ(ギ)ヌ。川ト云ハンヨリハ寧口瀑ト称スルヲ充当トスヘ(ベ)シ」という一文が記されているという。

デ・レーケが「これは川ではない滝である」と言ったというエピソードには、低い平地に住んでいるオランダ人に日本の急流河川のこ

となど理解できるはずがないという気持ちだ。込められていることもあつたようだが、オランダはもともと周辺諸国から多くの人々が移り住んできた国で、高い山のある国に親戚がある人達も多く、たくさんの方が長い夏休暇や新婚旅行で日本のアルプスより1000mも高い本場アルプスへ出かけることからオランダ人でも流れの急な川や滝を知っている人は大勢いると上林氏は指摘している。

デ・レーケは、「一般的に小滝群のない急流は、峡谷や下流の平野に確実に多くのトラブルを引き起こす。小滝群が存在しないことが常願寺川の特徴のひとつでもある」と書いている。上林氏によると、「滝」があると、「位置エネルギー」が失われるばかりでなく、流速も小さくなり、洪水の破壊力が小さくなるのだという。^⑩

参考文献：「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」（上林好之著・草思社）、
「近代土木事業史に関する研究 高田雪太郎の生涯と業績」（市川紀一著）、